



滝小だより

滝頭小学校学校だより 2019th

令和元年 8月30日

9月号

横浜市立滝頭小学校

校長 鶴飼 数夫

手をつなごう 笑顔いっぱい 大好き滝小

Hand in hands, Shining Smiles, We ♥ TKG



〒235-0011 横浜市磯子区丸山 2-25-1 TEL 045-751-0344、0345

Fax 045-761-9392

URL: <http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/takigashira/>

滝頭小 検索

バーチャルとリアル

校長 鶴飼 数夫

夏休みが明け、子どもたちの元気な笑顔が学校に戻ってきました。今年も、ここ数年なみの相変わらぬ猛暑でしたが、約一ヶ月ぶりに全員と無事に再会できたことが何よりもです。まだまだ暑い日が続きますが、少しずつ調子を整えて、前期末から後期に向けてがんばっていきたいと思います。

さて、私事で誠に恐縮ですが、この8月に長崎へ旅行に行ってきました。自分にとっては、初めての場所なので、とてもワクワクして現地に臨みました。今回の最大の目的地は、「軍艦島」です。面積約6.3haの小さな海底炭坑であるその島は、岸壁が島全体を囲い、高層鉄筋コンクリートが立ち並びその外観が軍艦に似ているところから「軍艦島」と呼ばれるようになりました。最盛期の1960年には約5,300人ものが住み、当時の東京都区部の9倍もの人口密度に達し、島内には小中学校や病院など生活は全て島内で賄えるようになり、映画館やパチンコホールなどの娯楽施設もそろっていたそうです。ここから産出される石炭はとても良質で、明治時代から続く日本の近代化を支えましたが、主要エネルギーが石炭から石油へと移行したことにより1974年に閉山。島は、炭鉱・生活の施設を残したまま無人となりました。外見上は廃墟となってしまいましたが、2015年に世界文化遺産に登録され、現在は観光資源として映画のロケ地にもなり、上陸ツアーや接岸クルージングなどを通して実際に見学することができます。



しかし、見学を予定していた日に台風の直撃に遭い、残念ながらその姿を実際に見ることはできませんでした。よほど運がない自分に落胆していたところ、何と宿泊していたホテルの目の前に「軍艦島ミュージアム」という施設を発見しました。行ってみると、そこは、軍艦島のことをあらゆる角度からデータ化したデジタルアーカイブ資料館だったのです。何千点にも及ぶ写真や動画をもとに構築した大型映像やCGによる3D映像、Googleストリートビューやドローン空撮映像などにより、当時の人々の生活や現在の島の様子が、手に取るように伝わってきました。「なるほど、これなら台風が来ても軍艦島の様子がいつでも安全に分かるな。そして何よりも、劣化がないので後世にしっかりと記録として残せるな。」と、VR（バーチャルリアリティ）技術の進歩と利便性に感心しました。

同様のことを原爆資料館でも感じました。原子爆弾の破壊力や被害の様子、投下直後の長崎の街の惨状を伝えるために、やはりCGや映像をなど様々な方法を工夫して展示がしてあります。冷房の効いた快適な館内で、ゆっくり・じっくりと原爆のことを学ぶことができました。しかし、その中で、圧倒的な説得力をもっていたものは、熱線が折れ曲がった鉄骨や溶けたガラス瓶、11時02分で止まったままの時計や黒焦げの弁当箱などの実物です。そして、資料館の外にある焼けただれた浦上天主堂の遺構や被爆した遺物が埋まった地層などがさらに静かに力強く語りかけてきます。強い日差しを浴びながら爆心地近くの平和記念公園に登れば、74年前の8月9日の暑さに思いを馳せることができます。やはり、実際に長崎の地を夏に訪れてこそ感じられるリアル（現実）がそこにはあります。ゲーム画面や映画に出てくる凄惨な場面をはるかに超えた、リセットやリピートのできない、悔やんでも取り返しのつかない現実を想像することが大切です。

バーチャル（仮想的・擬似的）なものは、直接見たり触れたりすることが難しいことでも擬似的な体験を可能にするとても便利なものですが、あくまでもそれは、リアルを補完するためのものであって、超越することはできません。現実と混同してしまうことはあってはならない錯覚なのです。

やはり、いつかもう一度、長崎を訪れて軍艦島を直接見るべきだと自分に言い聞かせました。